

シャラポワ物語

シャラポワの幼少期の極貧生活と彼女を支えた父親の物語を紹介したいと思います。
これを読んでから、2004年にウィンブルドンで優勝したDVDを見ると更に感動します。

シャラポワが生まれたのは1987年4月。両親はチェルノブイリに住んでいましたが、原発事故が起きて直ぐに母親が妊娠しました。父親はチェルノブイリから3000km離れた西シベリアのニャガンへ移住することを決意しました。家を捨て、仕事も捨てて、油田で安い給料で働いていたので、貧しくて幼稚園も行けず、おもちゃも買ってもらえない生活でした。唯一の楽しみは父親が使っていたラケットの柄を鋸で切って、やっていた壁打ちテニスでした。雨の日も雪の日もやっていたので、父親はテニスの才能を見出し、特訓を始めました。

父親から「強くなりたかったら、人前で泣いちゃダメだ」と言われ、特訓を続けていた6歳になったある日、ナブラチロワ選手がモスクワに来ることになりました。父親はお金を工面して、その催しに参加させました。ナブラチロワ選手がどこに打っても、シャラポワが正確に返して来るので、フロリダ州にあるニック・ボロテリー・テニスアカデミーへの入学を勧めました。しかし、アメリカに移住するには、お金がありません。そこで、自分の両親と奥さんの両親から借金をし、それでも足りないので、奥さんを1人ロシアに残して、シャラポワと父親の2人だけで移住しました。

しかし、テニスアカデミーの入学金・授業料・宿舍代などで580万円は必要とのことでしたが、父親の所持金は僅か7万円。シャラポワを入学させるため、父親は、朝は食器洗い、昼はビルの清掃、夜は工事現場でと、言葉も通じないアメリカで2年間働き続け、やっと入学させました。入学テストを受けると、その類稀な才能を目にしたニック・ボロテリーにより300万円の奨学金を与えられ特別奨学生として許可されました。

アカデミーに入学したシャラポワでしたが、その才能ゆえに妬ましく思うスクール生からいじめを受けることになりました。それを知った父親は「前に、強くなりたかったら人前で泣いちゃダメだと言ったが、お父さんは別。お父さんと2人の時は泣いてもいいんだよ」と言ったとのこと。そして、11歳という若さで1億円の契約金でスタープレーヤーの間取りをし、2004年に17歳2ヶ月でのウィンブルドン女子シングルス優勝を果たしました。優勝が決まった後に、観客席に駆け上がり、父親と抱き合い、父親の携帯電話を借りて母親へ電話をしたシーンは印象的です。

4歳のシャラポワ



9歳のシャラポワ



11歳のシャラポフ



14歳のシャラポフ

